

一郎」君等が居て學科の時間には同じ教室で顔を合せてゐたのだが、私を指導してくれたのはこのコスモス會の連中だつた。特に藤田、長谷川、加藤「静児」の三氏にはいつも、作品の批評をしてもらつてゐた。

〔憶ひ出すまゝに〕小絲源太郎『日本美術』第二卷第四号明治美術研究号。昭和十八年四月。なお、伊豆修学旅行の詳細は『東京美術学校校友会月報』第六卷第三、第四号参照。

確かに、藤田嗣治らのクラス（西洋画二年）では入選者が五人も出たのであるから、生徒の興奮も尋常でなかつたに違いない。

文展は、その是非は兎も角、画家や彫刻家の登龍門となつた。したがつて本校の生徒たちは否応なしに関心を持たざるを得なくなつた。先輩の和田三造は「南風」に続いて「燐燻」（四十一年第二回文展）が最高賞の二等賞を獲得して一躍画壇の寵児となり、文部省留學生に選ばれた。美術の分野の文部省留學生は従来本校教官、卒業生に限られ、帰国後本校の教壇に立つことが条件とされていた。（和田は正木直彦や黒田清輝の期待に反して教官となることを辞退した。）このような美術家奨励法は生徒たちの夢をかきたて、制作意欲を燃え上らせる一因となり、そこにこれまでとは違つた活気が生じたが、反面、文展入選のみを目ざし、平常の勉強を疎かにしかねない風も生じ、学校当局を悩ますことともなつた。なお、本校は創設以来いわゆる純正美術と美術工芸を同列に置く立前であつたので、文展において工芸部門が設けられなかつたことは本校工芸方面の人々の憤慨を招き、彼らを中心とする工芸の文展参加運動が開始されること

となつた。

### ⑪ 大沢三之助の留学

本校図案科主任教授大沢三之助は、明治三十九年十月二十四日付で文部省より「建築裝飾研究ノ爲満三箇年間英國佛國及伊國へ留学ヲ命ス」との通知を受けた。留学期間中の図案科建築学の授業は、大沢に代わり東京帝国大学工科大学助教関野貞に囑託された。留学期間中の履歴を「東京美術学校旧職員履歴書」より転載する。

明治四十年一月廿四日 横濱解纜留學ノ途に上ル

同 四十一年四月廿七日 明治四十一年八月三日ヨリ英國倫敦ニ

開催セラルヘキ第三回萬國美術會議へ

出席ヲ命ス(文部省)

同 四十三年七月十一日 日英博覽會橫濱正金銀行支店設計ノ爲

名譽大賞ヲ受ク

十月十九日 歸朝ス

『東京美術学校校友会月報』の通信記事によると、大沢は、明治四十年二月二十四日バンクーバーに到着し、シアトル、サンフランシスコ、オークランド、ニューヨークを経て、明治四十年三月渡英したことが知られる。同四十一年の秋から冬にかけてパリに滞在、同四十二年秋にはイタリアを訪問している。明治四十三年三月には国費留学満期となるが、私費留学延期を願ひ出て許可されている。同四十三年九月三日英国発の加茂丸にて帰朝。帰朝後は、建築学会の常議員となる。また、明治四十四年の四月と五月の『美術新報』に「第三回万国美術會議に就いて」の報告を発表している。